

授業に参加することができない自閉症のある児童が、保護者との合意形成を丁寧に進め、特別支援学級に在籍を変更し、学習活動に部分的に参加するようになった事例

1. 事例の概要

A児は、B小学校の特別支援学級に在籍する、自閉症の小学3年生である。小学2年生までは、通常の学級に在籍していた。入学当初から授業には参加せず、教室にもほとんど入らなくなり、別室で個別の対応を行った。できる限り通常の学級での授業や生活に参加できるようにしてきたが、ほとんど参加はできなかった。こうした状況から、当面、特別支援学級に在籍を変え、小集団で、A児の発達や興味・関心等に配慮できる場所で、授業や生活を送ることが有効ではないかと保護者に提案した。その上で、A児の保護者との合意形成が課題となった。通常の学級在籍時は、学級担任だけでなく、特別支援コーディネーター、個別の対応教員も参加して、懇談を行い、A児の日常の様子を伝えた。母親だけでなく、父親にも参加してもらった。日常的には、学級担任や個別の対応教員が保護者の悩みや願いを聞き取るよう、細かな配慮を行った。また、通院している病院の医師や作業療法士等と話し合い、できるだけ同じ方向で、保護者に対応した。大学の特別支援教育研究者やスクールカウンセラーとの相談も実施した。保護者との合意形成に至り、特別支援学級に在籍をしているが、現在も具体的な合理的配慮について、保護者との合意形成を進めている。

キーワード 自閉症、在籍の変更、特別支援学級、合意形成、他機関との連携

2. 児童の実態

入学時は通常の学級に在籍していて、給食は在籍クラスで食べていたが、授業にはほとんど参加しなかった。他の児童とは、積極的に関わることはなく、自分の興味や関心を共有することができる児童とは話したり、遊んだりすることはあった。小学3年生からは特別支援学級に在籍し、A児の発達、興味・関心等に応じた学習集団と学習内容を設定している。特別支援学級では、少人数集団で、発達課題に即した学習内容で授業を行い、A児は参加し始めている。体育では、縄跳びや鉄棒等、個別の運動には参加し、リレーも自分の順番になると参加することができた。3学期には、特別支援学級で取組んだ劇活動にも参加し、舞台発表を行った。

3. 本事例に関する基礎的環境整備

- B小学校では、専門性を維持・発展させるために、研究授業を行い、多くの人に意見を求めている。また、特別支援学級担当教員の会議では、児童の実態や授業づくり等を論議し、専門性を高めている。【基礎2】
- 特別支援学級担当教員で、教材・教具の開発を行っている。通常の学級の教員と教材・教具の交流も行う。毎年、教材一覧表をつくり蓄積すると共に、倉庫に保管し、いつでも、どの教員でも使用できるようにしている。【基礎4】
- 特別支援学級には教室、音楽室、プレイルーム、小体育館等がある。専用の砂場、

遊び場もあり、多様な活動が行えるようにしている。また、書画カメラ、視聴覚機器等があり、ICT機器も児童の指導・支援に生かすようにしている。【基礎5】

4. 合意形成のプロセス

通常の学級在籍時は、2か月に1回、保護者との懇談を行い、担任、特別支援コーディネーター、個別の対応教員が参加した。1年生3学期からは父親の参加をお願いし、担任や個別の対応教員がメールや電話で日常的に保護者とのやりとりをした。家庭訪問も適宜行った。A児は乳幼児期から通院を続け、医師からだけでなく、作業療法士、言語聴覚士にもアドバイスを受けている。保護者の同意も得て、担任、個別の対応教員が、医療機関と話し合うようにした。大学の特別支援教育研究者やスクールカウンセラーと保護者との相談対応も行い、学校ではない立場からアドバイスを受けてもらった。保護者と学校だけの関係ではなく、外部者・機関からの意見は、保護者にとって受け入れ易く、合意形成を図る上で有効に働いた。このような取組を通して、特別支援学級に在籍し、教育を受ける方向をとるということで合意ができた。

5. 合理的配慮の実際

- 特別支援学級では、自立活動も含め、特別支援学校の教育内容についても取り入れるようにしている。そのため、A児の興味のあることを取り入れた学習内容とすることができた。また、A児がこれまで学びが十分でなかった文字の学習や下学年の学習内容にも取り組むことができた。【合理①-1-2】
- 大きい集団ほど参加しにくい面がみられるので、小集団の活動から保障することを始めた。通常の学級に在籍していた時は、通級指導教室に通う児童と一緒に学習、遊びの活動を行った。また、特別支援学級の授業が経験できるよう、校内で合意し、体育や遊びに参加するようにした。【合理①-2-2】
- 通常の学級在籍時には、在籍学級教室近くに、居場所としての部屋を用意し、個別の対応をした。また、特別支援学級でも、プレイルーム等、休憩場所となる部屋を確保した。授業や生活の中で、一時的に休憩場所に行き、気持ちをきり変えることで、本来の教室に戻ってくる事が出来てきた。【合理③-2】

6. 本事例の成果と課題

個別の対応・支援、特別支援学級での指導を受けることによってA児が少しずつではあるが着実に成長していることを確認した。保護者が学校でのA児の成長の様子を見たり、聞いたりすることで合意形成を図った。A児の実態と課題に応じた学習内容・方法の追究、外部機関との連携、教員間の協力があつたことと、専門性のある個別の対応教員を非常勤講師として確保できたことが要因だったといえる。

A児の集団活動への参加は増えつつあるとはいえ、まだ参加できない状況は続いている。具体的に、どういった学習内容を用意し、指導・支援が必要なのかを考え、つくり出していく必要がある。その際、A児が参加できないから、興味・関心がないからと、参加をあきらめたり、興味・関心のあるものだけに限定したりすることは避けたい。集団参加の楽しさや喜びを感じられるような指導・支援を進めたい。